

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720233

研究課題名（和文） 日本近世における宗教論争の地域的構造に関する研究

研究課題名（英文） Studies on the regional structure of religious controversy in Early Modern Japan

研究代表者

小林 准士 (Kobayashi Junji)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：80294354

研究成果の概要（和文）：

中国地方西部の真宗地帯において近世後期に繰り返し起こっていた同宗の神祇不帰依の宗風をめぐる紛争の地域的・歴史的条件について検討し、真宗僧侶による宗風の徹底、真宗門徒による講の結成に伴う宗教者間の競合、神職による小祠や森神の祭祀の多さなどが紛争の要因になっていたことを明らかにした。また、神道と仏教、あるいは真宗僧侶間の教義をめぐる論争の検討を通じて、多元的な秩序における宗教宗派間の関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

I examined the regional historic condition of the dispute over the doctrine of the Shin Buddhism that happened repeatedly in the zone where the Shin Buddhism in western Chugoku district was superior late in the early modern times. As a result, thorough doctrine by the priest of the Shin Buddhism, the competition between people of religion with the holding of the meeting by the believer of the Shin Buddhism, numerousness of the religious service of the gods by the Shinto priest clarified that it was in the factor of the dispute. In addition, through the examination of the debate over the doctrine between priests of Shinto and Buddhism or the Shin Buddhism, I clarified the relations between religion denominations in pluralistic order.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2009年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2012年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：浄土真宗 神祇不帰依 神祇礼拝 神道講釈

1. 研究開始当初の背景

(1) 近世後期に中国地方の浄土真宗優勢地帯で「神棚おろし」をめぐる争論が起こった要因について、先行研究の間では見解の対立が生じていた。具体的には、「神棚おろし」の

主体として真宗門徒、とくに小百姓層を想定する児玉識の学説と、神職による神棚設置の強制という動向（神棚と仏壇の競合）を重視する引野亨輔の見解である。このような状況を踏まえ、事例の収集を図り分析を開始しは

じめていたところであった。具体的には、浄土真宗の神祇不帰依の宗風をめぐる争論の傾向（パターン）については分析をある程度済ませており、争論発生の構造的要因を明らかにすることが課題となっていた状況であった。

(2)1990年代以降、日本近世史研究においては、書籍の出版や流通、板本と写本の性格の相違、あるいは蔵書に対する研究、および神道講釈などオーラル・メディアに関する研究が発展していた。こうした状況を踏まえ、本研究を開始することになった。とくに、直接的な先行研究としては、引野亨輔による安芸国における神道講釈を対象とした研究があり、これを踏まえ研究をいかに発展させるかが課題となっていた。

(3)同様に、1990年代後半から、宗教社会史研究が盛んとなり、地域における多様な宗教的要素を視野に入れた研究が迫られていた。具体的には、特定の地域における僧侶、神職、修験者、陰陽師などの宗教者の構成や、寺院や神社、小祠・堂舎などの宗教施設と宗教者との関わり、以上の要素によってかたちづくられる宗教的環境が問題となっていた。本研究においても、このような視点を踏まえ、浄土真宗の神祇不帰依の宗風をめぐる争論を分析することになった。

2. 研究の目的

(1)近世後期に中国地方の浄土真宗優勢地帯（仏教寺院に占める浄土真宗寺院の割合が高い地域）を中心に、同宗の神祇不帰依の宗風をめぐる争論が起る要因を明らかにすることを課題とした。

(2)近世における諸教（儒学、仏教、神道）間、あるいは仏教宗派間の論争（紛争）に見られる、諸教・宗派間の秩序を解明することを目的とした。その際には、幕府や藩などの政治権力と宗教者集団との関係や、出版業の発展という条件との関わりについて検討を加えるようにした。

(3)宗教論争（紛争）の検討を通じて、日本における宗教宗派間の関係とその秩序の特徴を明らかにするとともに、近世後期の宗教史的動向に関し、歴史的な位置づけを図ることをめざした。その際には、幕府や藩などの政治権力と宗教者集団との関係や、宗教の信者（真宗門徒、氏子等の側面）との関係について検討を加えるようにした。

3. 研究の方法

(1)浄土真宗の神祇不帰依をめぐる争論の事例に関わる史料を収集したうえで、改めて紛

争の傾向を分析するとともに、地域における宗教者の構成、宗教施設と宗教者との関わり、紛争当事者の動向などについて分析を加えることとした。

(2)真宗僧侶間の教義をめぐる論争に関わる書籍（功存『願生帰命弁』、宝巖『興復記』）や、出版をめぐる争論に関わる史料（京都本屋仲間との争論について記した「興復記一件」（龍谷大学図書館蔵））を分析し、宗派間の紛争解決に見られる特徴や論争の構図等を明らかにした。

(3)京都の吉田家の配下で、垂加神道を奉じていた栄名井聡翁の弟子の神道講釈師であった矢野左倉太夫の旅の軌跡を追跡するとともに、旅先で起こった真宗僧侶との論争について分析した。

4. 研究成果

(1)中国地方西部で浄土真宗の神祇不帰依の宗風を僧侶が門徒に徹底し始めたことを史料上確認できるのが18世紀初め頃であったことを指摘したうえで、宗風をめぐる争論が起る条件として、

- ①小寄講における僧侶の法話の聴聞など、門徒による信仰に関わる活動の活発化、
- ②小寄講への関わりをめぐる地域の寺院住職と旅僧・弟子僧などとの競合関係、
- ③専門の神職による小祠や森神祭祀への関与とその多さ、
- ④領主による小寄講における法談の規制、などの事柄があったことを指摘した。

また、門徒による信仰に関わる活動の活発化が宗教者間の競合をもたらし、そのことを契機として真宗僧侶による宗風の徹底が起ること、そして宗風の徹底が争論に繋がるのは、この地域において専門神職が多数存在し、神事の執行権をほぼ掌握していたからであることも指摘した。

さらに、真宗門徒による信仰に関わる活動の活発化に対しては、特に凶作年となった場合などに、領主が規制をかけることがあったが、こうした政治権力による民俗的な領域への介入は却って宗教者間の競合を顕在化させ、争論を惹起したことも指摘した。

(2)出雲国における宗教者の構成及び宗教者と宗教施設との関わりについて、

- ①出雲国北東部では禅宗寺院（特に曹洞宗）が多く、南西部とくに飯石郡南部（現在の飯南町）では浄土真宗寺院が多いこと、
- ②真宗寺院は観音堂などの辻堂の管理はせず、他宗派の寺院が管理していること、
- ③天台宗、真言宗などの密教系の宗派の寺院が少ないために、神社や小祠・森神に祀られる神々の祭祀は、おもに神社に奉仕する神職

が行っていたこと、

④とくに浄土真宗が優勢な飯石郡南部では、真宗寺院が多数派を占めるにもかかわらず、辻堂の管理はおもに少数派の禅宗寺院が行っているとともに、神社・小祠や荒神等の森神（樹木を標識として祀る神）の祭祀については、神社に奉仕した神職たちが行っており、また修験者は減少傾向にあるなど、宗教者の構成が単純になっていること、などを明らかにした。

(3) 浄土真宗の有力な本山の一つである西本願寺の学林（僧侶の養成と教学の統制を担う教育機関）の能化（長）を務めた功存が著した『願生婦命弁』という三業婦命説を唱えた書物に対する批判書である、『興復記』という書物の出版が、西本願寺学林によって妨害された事件の検討を通じて、近世における宗派間（東西の本願寺どうし）の僧侶による論争と書物の出版との関わりを検討した。

その結果、異なる派に属する僧侶どうしの論争に端を発した紛争の解決にあたっては、自宗の僧侶に対する本山による身分的統制権の尊重という原則と同時に、出版を通じた当事者どうしの解決の優先、という原則が当事者に意識されていたこと、それから訴訟の解決にあたっては、これらの原則の適用の調整が図られていたことを明らかにした。そして、こうした調整が必要であったのは、諸原則の関係がどのようであるべきかについては、当事者の間で認識の違いがあったためであることも指摘した。

さらに、他宗派の僧侶の著作に対する本山の教学統制は認められなかったこと、宗派間の論争は書物の出版を通じた応酬によって図られており、これは本屋仲間による出版の自律性によっても裏付けられていたことを論証した。

(4) 19世紀初め頃に九州を起点として、栄名井聡翁に率いられた神道講釈師の集団の活動が活発となり、その中の一人が和泉国出身の矢野左倉太夫という人物であったことを明らかにしたうえで、彼が九州北部から中国地方、四国地方にかけて広範に神道講釈を行っていたことを明らかにした。

そのうえで、出雲国における神道講釈の活動について詳細な検討を加え、浄土真宗に対する激しい批判や中傷を伴う講釈によって、飯石郡南部の真宗僧侶との間で紛争が起こったことを指摘した。また、こうした講釈が行われる背景としては、当該地方における真宗の神祇不帰依の宗風をめぐる紛争のあったこともあわせて言及した。

以上の点の検討を通じ、神道講釈の内容をめぐる論争や紛争にあたっては、当事者が直接対決するかたちでの解決は基本的に避け

られていたものの、写本の作成を通じた論争は規制外であり、矢野左倉太夫が去った後も論争は続いていったことなども明らかにした。

(5) 18世紀の後半に起こった讃岐国における神祇礼拝の是非をめぐる真宗僧侶（了空と教乗）どうしの論争を分析した結果、浄土真宗の神祇不帰依の宗風など、神道や他宗派との紛争を引き起こしかねない問題については、内心における信仰と世俗の秩序とをどのように折り合いを付けるかをめぐって、僧侶間に見解の相違があったことなどを明らかにした。

具体的には、神社等（阿弥陀如来以外の余神余仏）の礼拝にあたって祈念を込めないことを前提とすれば許容する了空という僧侶の立場と、政治権力や世俗との軋轢をひきおこさない範囲で神祇礼拝を認めるものの、極力そうした機会を制限しようとする教乗という僧侶のような立場があったことを明らかにした。

そして、このような論争が展開する背景として、讃岐国の真宗寺院に属する僧侶がいくつかの学派に分かれて競い合う状況のあったことを指摘し、同時にそのような競合が起こる条件としては、真宗門徒による講を基盤とした活動の活発化に伴い、僧侶が教化を通じた門徒の信仰の獲得をめぐる競うような状況のあったことを指摘した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

① 小林准土, 近世真宗における神祇不帰依の宗風をめぐる争論の展開と構造, 史林, 査読有, 96-4, 2013, (掲載確定)

② 小林准土, 神祇礼拝論争と近世真宗の異端性, 歴史評論, 査読無, 743, 2012, 49-65

③ 小林准土, 宗教施設と宗教者身分からみた近世出雲の特徴—松江市域を中心に—, 松江市歴史叢書 4 松江市史研究, 査読無, 2011, 1-15

④ 小林准土, 神道講釈師の旅と神仏論争の展開—矢野左倉太夫の活動に即して—, 島根大学法文学部紀要社会文化学科編 社会文化論集, 査読無, 7号, 2011, 15-35

⑤ 小林准土, 三業惑乱と京都本屋仲間—『興復記』出版の波紋—, 書物・出版と社会変容, 査読無, 9号, 2010, 1-22

〔学会発表〕（計2件）

①小林准士, 神祇礼拝論争と近世真宗の異端性, 龍谷大学仏教文化研究所研究談話会, 2011年9月29日, 龍谷大学（京都市）

②小林准士, 三業惑乱と京都本屋仲間, 書物・出版と社会変容研究会, 2009年10月3日, 一橋大学（国立）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林准士 (Kobayashi Junji)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：80294354

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし